サッカーのシュート場面に関する研究

The research of shooting situations in soccer

1K03A225-7　　氏名　茂木拓郎

指導教員　主査　堀野博幸　先生　　副査　石井昌幸　先生

Ⅰ. 序論

現在のサッカー界において得点力不足、決定力不足という言葉はどこでも耳にする。どのようにすれば得点を効率よく奪うことができるのか、また決定力というものをあげることができるのか。このことに関しては全世界のサッカー関係者が日々議論を交わしている。

この問題に関して日本も例外ではなく、長年話題となっている。1998 年のフランスワールドカップに初出場してから 8 年、現在の日本は世界のチームと比べて得点力、決定力の面で違いがあるのか考えたい。

そこで今回は 2006 年ドイツワールドカップを題材にして、シュート場面に関するゲーム分析を行う。そのなかからシュートシーンにおいては、どのような要素が影響を与えているのかを考えてみる。そして世界のチームとの比較の中で、日本が今後どのように変わっていく必要があるかを考えてみる。

Ⅱ. 方法

FIFA ワールドカップドイツ大会においてベスト 8 に残ったイタリア、フランス、ドイツ、ポルトガル、アルゼンチン、ブラジル、イングランド、ウクライナに日本を加えた全 9 チームの試合を、グループリーグから決勝トーナメントまで全 43 試合をビデオ録画した。そしてその中からシュート場面を抽出し、さまざまな角度から分析を行った。具体的には時間帯別シュート数、ボールの行方、シュートした部位、シュートした選手、シュートまでのタッチ数、プレッシャーの人数、シュートを放った位置、シュートまでのパスの本数、ラストパスの精度、シュート位置よりゴール方向にいた相手選手の人数の 10 項目についての分析を行った。

Ⅲ. 結果

分析結果をみてみると日本と他の 8 チームの間にはさまざまな差があらわれた。

まずシュート数に関して日本は他の 8 チームの平均と大きな差があった。またシュート数に対する枠内シュートの割合はベスト 8 のチーム平均とは差が開いた。さらに 1 試合平均の得点率についてみてみると、他の 8 チームがすべて 1.0 点以上であるのに対して、唯一 1.0 点以下となってしまった。

個々の結果で特徴的なことは、時間帯別のシュート数に関しては、特に立ち上がりの 5 分と終了間際の 40 分以降に特徴があらわれた。シュートした部位に関してはそれぞれのチームで特徴があり、日本は頭とその他のシュートにおいて非常に割合が低いという特徴が見られた。シュートを放った位置に関しては、近距離からのゴールの割合が高かったことはもちろんのこと、中･長距離の割合も高くなっており、重要性が増していた。シュートまでのパスの本数については、カウンターアタックと考えられるような少ない本数でのシュートの割合と、しっかりとパスをつないでいる割合が同じようにあった。以上のような特徴的な結果が得られた。

Ⅳ. 考察

まず基本的は考え方として、ゴールを奪うためにはシュートを打たなければならない。やはりシュート数が多ければ多いほどゴールに結びつく確率もあがってくる。その上で枠内シュート率をあげていく必要があると考えられる。そして結果として得点率というものもあがってくると考えられる。

細かい分析について特徴的だったことは、時間帯に関しては立ち上がりの 5 分と終了間際の 40 分以降が特に重要であり、この時間帯にいかに効果的にシュートを打つことができるかは大きな問題である。日本はこの点改善する必要があると考えられる。シュートした部位に関して日本は頭とその他でのシュートの割合が非常に低く、クロスボールやセットプレーからのシュートにおいて改善の余地が考えられる。またゴールへの意識、力強さの面で変えられる部分があると考えられる。ラストパスの精度やプレッシャーの人数による結果からも同じようなことが言えた。シュートを放った位置に関してやはりゴールエリアを含むペナルティーエリアないでのシュートがゴールに結びつきやすい。この点に関して日本は割合が低く、改善する必要がある。また中･長距離からのシュートの重要性も高まってきており、今後適応していく必要があると考えられる。

サッカーは日々変化しているため、これからも最新の情報を分析していく必要がある。